





夏の日吉キャンパス

らいたいのが、校舎群が立つ敷地裏手、都会では貴重な自然があふれる蝮谷と周辺の日吉の森である。蝮谷とは、ちょっと恐ろしい呼び名だが、キャンパス開設以前の未開拓のやぶにはマムシが生息していたといわれ、実際に開設当初にはよく蛇が目撃されたようだ。蛇を捕まえて教室に持ち込み、教員を驚かせた剛の者もいたし、弓道場の道場開きの際に、当時の小泉塾長から山腹にばかり矢が当たることを指摘された体育会会長が「蛇を追い払っているのだ」

と答えたという逸話もある。しかし、それも今は昔のこと。今は蝮谷体育館をはじめ、体育会各部の練習施設が点在する緑したたる谷あいであり、練習に励む部員たちの気合のこもった声も聞こえてくる。

第2次世界大戦後、1949年9月まで日吉キャンパスの約半分が米軍に接収された。兵士の暖房用に用いたのか、木々は無造作に伐採され森は荒廃していた。それを悲しんだ塾員有志による緑化運動が始まり、蝮谷の各所にメタセコイアなどの植樹が行われた。また高等学校の卒業記念として松や杉の若苗も植えられた。

その蝮谷を中心に周辺に広がる日吉の森は14万㎡に及び、そのうち約8万㎡は落葉樹を中心とする四季の変化に富んだ雑木林である。1987～90年に実施された教員グループの調査では、絶滅が危惧される貴重種や新種を含む1300種近い動植物が確認されている。生物多様性の拠点であり、教職員で組織される「日吉の森に学ぶ会」による自然観察会や、教員・塾生・市民連携による森の回復作業も進められている。また



黄葉が美しい銀杏並木



「塾長と日吉の森を歩こう」の様子

1999年からは教養研究センター日吉行事企画委員会主催の「塾長と日吉の森を歩こう」というイベントが始まり、ほぼ毎年春か秋に開催されている。